

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 3 (2021) 年度

分 野 | 音楽 (サクソフォン)

研 修 先 | フランス (パリ)

研 修 期 間 | 1 年研修

氏 名 | 袴田 美帆

1. 研修目的（課題）

パリ国立高等音楽院サクソフォン科の最終学年では、他の楽器とのアンサンブルや作曲家とのコラボレーションを始め、日本帰国後にオリジナルのコンセプトに基づくコンサートが、自分で企画出来るような研修を行っていきます。また、音楽分野だけではなく、他分野のアーティストたちとも交流することで、新しい空間創造をしていけるアーティストを目指します。

サクソフォンを用いた室内楽作品の研究

- サクソフォンを用いた室内楽作品を、クラシックから新曲まで幅広くアプローチしていき、コンサートのプログラムに積極的に取り入れていきます。
- 室内楽の授業では、サクソフォンの教授だけではなく、他の楽器の教授からの指導も受けていきます。

幅広い文脈に合わせたコンサート企画の実践的研究

- 神戸大学で学んだアートマネジメントの知識や人との繋がりを活かし、何らかの自主企画を現地でを行います。また、国内のフェスティバルにも足を運び、企画や運営の仕方、助成金の申請方法なども学びます。
- 即興演奏を用いたプロジェクトや、他芸術とのコラボレーション企画を提案し、学生コンサートとして美術館や歴史文化施設で演奏する中で、地域社会と音楽を繋げるきっかけ作りを学んでいきます。

サクソフォン科第二過程の公開卒業試験

- サクソフォンのオリジナルレパートリー、作曲家への委嘱作品、電子音楽作品等を取り上げ、多様なプログラムでありながらも、何らかのテーマに基づく一貫性を楽しめるような卒業リサイタルを実現させたいです。

2. 研修日程

研修先 : パリ国立高等音楽院サクソフォン科第2課程

所在地 : フランス（パリ）

指導者 : クロード・ドゥラングル

研修期間 : 令和3(2021)年9月1日～令和4(2022)年8月15日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題①】サクソフォンを用いた室内楽作品の研究

【研修内容・方法①】

1年を通して、サクソフォンカルテット、サクソフォンとピアノのデュオ、ヴァイオリンとのデュオ、他の楽器を交えた編成を組み、オリジナル作品や編曲ものなど、様々な時代の作品に取り組みできました。これまで演奏してきたソプラノ、アルト、テナーサクソフォンに加えて、初めてバリトンサクソフォンに取り組むことが出来たのも、今後のレパートリーを広げるいい機会となりました。サクソフォンはまだ歴史が浅く、数少ないレパートリーの中から、メンバー全員がやりがいのある曲を選ぶのは大変でしたが、編曲も含めて自分らしいレパートリーを構築し始めることが出来たので、これからも続けていきたいと思います。

【課題②】幅広い文脈に合わせたコンサート企画の研究

【研修内容・方法②】

私が在籍したサクソフォン科、室内楽科、即興科、それぞれの学科で、様々なテーマの企画に触れることが出来ました。サクソフォン科では、卒業試験のプログラムづくりを中心に組み、ピアノデュオで在籍している室内楽科では、2つの楽器が同等に鳴るような選曲、コンサートプログラムのバリエーションづくりに取り組みました。また即興科では、ジャズや民族音楽専門の教授によるマスタークラスやコンサートをはじめ、楽譜のない自由な奏法を強みとした空間演出など、奏者と観客が一体となる雰囲気づくりに取り組みました。

また、作曲科の新曲初演プロジェクトにも加わらせて頂き、初演に備えた準備過程を、指揮者、作曲家、演奏者、教授で共有しながら曲作りを行いました。ここでは、彼らの作曲に至った経緯、楽譜から期待される音響効果、特殊奏法の研究など、逐一作曲家たちと意見交換しながらリハーサルを進めていきました。初演ならではの緊張感、その都度ある新しい発見…今を生きる音楽の創り方を、最先端の現場で身をもって体験しました。

B) 研修の成果

大幅に達成できた

サクソフォンを用いた室内楽作品の研究

室内楽作品に取り組む中で、一緒に演奏する楽器に合わせた音量の調節はもちろん、近くで聴こえる響きとホール全体の響きを聴き分けるテクニックの大切さを学びました。アンサンブルの中での音色・奏法研究を行うことで、より柔軟なコントロール力が身に付くので、ソロで演奏するときの繊細な音色の変化にも対応できるようになりました。

また、既存のレパートリーだけでなく、若い世代の作曲家の作品を再演する機会も多くありました。作曲

家が、初演では叶わなかったような指示を聞いたり、曲の微調整や奏法の変更が行われたり、一度初演された作品がその後、レパートリーの一つとなる過程を見ることで、演奏者と作曲家間での大切な作業を肌で感じました。なので、今後は初演だけでなく、再演に焦点を当てたプロジェクトも積極的に行っていきたいです。

幅広い文脈に合わせたコンサート企画の研究

研修中はサクソフォン科、室内楽科、即興科、それぞれの学内コンサートの枠で、美術館や歴史文化施設での演奏機会を頂き、様々なコンセプトに合わせたプログラム作りを学びました。Jean-Jaques Henner 美術館、フランス国立公文書館、コンシェルジュリーなど、その時に開催されている企画展の内容や、それぞれの場所のコンセプトに合わせたプログラムを準備し、観客の層も考えながら、コンサートの進め方まで考えるようになりました。中でも、7月に行われた、コンシェルジュリーでの写真家とのコラボレーションコンサートでは、固定の客席はなく、奏者と一緒に移動しながら作品鑑賞をするというパフォーマンスに取り組みました。



コンシェルジュリーにて「ノートルダム火災」がテーマの写真展とのコラボレーション・即興コンサートを開催しました



ブルターニュ国際サクソフォン講習会の講師コンサートに参加しました

また、昨年度研修中に、本年度の演奏機会を得るために学内選考を通過した企画もあり、今後予定されているコンサートがいくつかあります。特に、パリ廃兵院（アンヴァリッド美術館）で開催予定の、作曲家・Edith Canat de Chizy 氏の作品をはじめとする女流作曲家に焦点を当てたコンサートでは、彼女のヴィオラのための作品を、サクソフォン用に編曲・初演する機会を頂きました。サクソフォン版初演にあたり、作曲家とのレッスンも予定されているので、しっかりと学んでいきたいと思えます。そして、パリ郊外のセルジー・ポントワーズ音楽院では、音楽理論科の生徒とのレクチャーコンサートが予定されています。ここでは、「水」をテーマに、ラヴェル、ライネッケ、そして同音楽院・山崎真采さんの委嘱作品「水の息」を演奏します。

研修中の成果にとどまらず、今後も変化し続ける環境に柔軟に対応しながら、企画の研究を続けていきたいと思えます。



フランス国立公文書館でのコンサート



Jean-Jaques Henner 美術館でのコンサート



在仏日本大使館主催イベントでのコンサート

サクソフォン科第二過程の公開卒業試験

5月に行われた卒業試験では、サクソフォンで奏でる「うた」をテーマに、イタリア人の作曲家を中心に様々な時代の作品を取り上げ、イタリア語で「Bal Canto (ベルカント)」とタイトルを付けました。プログラムは以下の通りです。

- Antonio PASCULLI / Ricordo di Napoli Scherzo Brillante (ソプラノサクソフォンとピアノ、原作はオーボエとオーケストラ)
- Luciano BERIO / Récit (Chemins VII) (アルトサクソフォンソロと弦楽アンサンブル、Vincent DAVID 編曲)
- Francesco VITUCCI / (Un)chant populaire (テナーサクソフォンとエレクトロニクス、初演)
- Vincent d' INDY / Choral varié (アルトサクソフォンソロと室内オーケストラ、Raphaël Jousse 編曲)



Antonio PASCULLI / Ricordo di Napoli Scherzo Brillante



Luciano BERIO / Récit (Chemins VII)



Francesco VITUCCI / (Un)chant populaire



Vincent d' INDY / Choral varié

リサイタルの幕開けに選んだのは、イタリアのオペラ作品から強い影響を受けた作曲家・オーボエ奏者のアントニーノ・パスクーリ「Ricordo di Napoli Scherzo Brillante」です。華やかで技巧的、ソリストィックでありながら、演劇的な要素もあるこの作品は、イタリアのゴンドラの音楽や民謡のメロディーを想起させます。

また、イタリアオペラの繋がりで、ルチアーノ・ベリオの名曲、セクエンツァ IXb のコンチェルトバージョン「Récit (Chemin VII)」にも取り組みました。リサイタルのメインとなるこの曲は、アルトサクソフォンと弦楽アンサンブル、パーカッションという編成で、メンバー全員がベリオの響きや歌い方を、一生懸命研究しました。

そして今回、一昨年に新曲初演でコラボレーションをしたイタリア人の作曲家、Francesco Vittuci 氏に、エレクトロニクスとのミクスト作品を委嘱しました。本番では、ステージ上の照明も工夫しながら、空間全体の音響を使い、エンジニアの協力のもと無事に初演を終えることが出来ました。

最後に選曲したのは、ヴァンソン・ダンディ作「コラル・バリエ」です。これは、パリ音楽院のエクリチュール科、指揮科に所属する友人に編曲をお願いし、室内協奏曲（11 の楽器のため）の編成で演奏しました。この作品は、サクソフォンのレパートリーで重要視されている、エリザ・ホール氏の委嘱シリーズの一つで、コンチェルト形式でありながらも、オーケストラに溶け込むような美しいメロディーと和声進行が特徴的です。

このプログラムに取り組む上で、「ベルカント」に相応しい音色の研究を、特に時間をかけて行いました。普段なかなか演奏する機会の少ない、アンサンブルとソリストという形の曲が2曲あり、さらにその2曲の中でも、ソリストィックなシーン、ソリストであるながらもアンサンブルに溶け込む瞬間など、奏法や表現の研究は尽きませんでした。もちろん、まだまだ音の柔軟性や多様性など課題は数多くありますが、貴重な卒業試験という場所で、このプログラムを沢山の仲間の協力のもと実現できたことは、一生記憶に残る素敵な経験となりました。

他の研修生・元研修生との交流、合同プロジェクト

研修中、在仏日本大使館の皆さんのお陰で、他分野で活動しているパリ在住研修生との交流も叶えることが出来ました。

中でも、造形作家の井上麻由美さんの作品に魅了され、ありがたいことに彼女の個展開催中に、パリのギャラリーでコラボレーションコンサートを行うことが出来ました。井上さんは、私が個人的に興味のあった「織り」専門のアーティストさんだったこともあり、大使館主催の交流会中にお声がけをし、彼女のアトリエ見学にも行って沢山お話を伺いました。このコンサートは「時代を紡ぐ」というテーマでプログラムを作り、このイベントのために、井上さんは楽譜を用いた新しい作品も制作して下さいました。本番ではこの作品の前に立って演奏し、作品からインスピレーションを受けながらの即興演奏も行いました。共演者は、元研修生のヴァイオリニスト・河村絢音さんで、それぞれのソロ作品も取り入れながら、様々な時代・スタイルを一本の糸で紡ぐ

ような形を目指しました。このコラボレーションは、お客さまの反応がとてもよかったので、帰国後に日本でも開催したいと思っています。そして、数年後にはもっと規模を大きくし、フェスティバルのような形で地域貢献もできるような企画を立ち上げることが出来たらいいなと思います。

また、元研修生の作曲家・ピアニストで同じくパリ音楽院で研鑽を積む、秋山友貴さんの伴奏科修士課程卒業試験では、彼の自作曲「Fioritura I」(サクソフォンとピアノ)を演奏しました。私の卒業試験後は、サクソフォンの教授と彼の教授、両方のレッスンを受けさせて頂き、作曲家目線の解釈が大変興味深く勉強になりました。なお、この9月にこの演奏が学内のビデオ制作プロジェクトに選ばれ、音響学科との生徒と一緒に録音・録画をしました。編集が出来次第、パリ音楽院のホームページにオンラインフェスティバルとして掲載予定です。



井上麻由美さんの個展でのギャラリーコンサート

C) 研修成果の活用計画

私は、この1年の研修やそれまでの留学生活を通して、今後は“地域と密に繋がりを持ったコンサートやフェスティバルの企画・運営”、“若手人材育成プロジェクト”の2点に軸において、日本で活動していきたいと考えました。これまでの研修では、サクソフォンのオリジナル曲をはじめとし、クラシックから現代までの室内楽、即興演奏や民族音楽や電子音楽など、幅広いレパートリーを習得し、様々なテーマのコンサートに出演してきました。中でも印象深く残っているのが、パリの歴史的文化遺産でのコンサートや、美術館の企画展に合わせたコンサート、空間全体を活用した即興音楽とインド民族音楽とのコラボレーションコンサートです。また、他の楽器の友人たちが参加していた講習会（参加にあたりオーディションがあり、講習会参加費は無料、さらにプロフェッショナルとしてのコンサート出演もある）も、若手人材育成という面で、とても素晴らしい取り組みだと感じました。このような経験から、2023年の秋に

完全帰国し、まずは地元・愛知県に拠点を置いて、地域との繋がりを大切にしながら活動を始めようと思っています。

私の地元、愛知県一宮市は、かつて織物産業で栄えた名残りで、ノコギリ屋根の繊維工場跡が数多く存在します。最近はそのような産業遺産を、次世代で活用しようとする動きが多くみられ、一宮市にも文化施設として再利用されている繊維関連の産業遺産がいくつかあります。ここを会場とした文化芸術活動を数年以内に実現したいと思い、パリで出会った過去の研修生の方々をお誘いして、「織り」にまつわるコンサート企画を立ち上げました。どんな形であれ、まずは小さな企画を開催できたら、将来的には音楽祭やアーティスト・イン・レジデンスを企画できるようなチームを作って行きたいと思っています。このように、これまでのフランスでの研修で学んだ、場所やその土地の文化と、芸術活動の関係性、をもとにしたプロジェクトの方向性を、今後は自分のゆかりのある日本の街に置き換えて考え、常に発展していけるような芸術活動を率先して行っていきたいです。

D) 研修国の情報

パリ市内には、フィルハーモニー、2つのオペラ座、シャンゼリゼ劇場、ラジオフランスなど、数多くの劇場やコンサートホールがあります。さらに、現代曲中心に公演を行っている小・中規模のホールや、アーティスト・イン・レジデンスをサポートしている文化施設など、至る所に多様な芸術と関わる場所が存在します。もちろん、フランス国内には音楽や芸術に馴染みのない人も多いですが、パリに住んでいると、美術館コンサートでの室内楽コンサートや、アパートでのサロンコンサート、現代アンサンブルや、移民が多い国ならではの民族音楽など、幅広いコンサートを学生料金で気軽に楽しむことができます。また、パリから離れた地域で盛んなイベントとして挙げられるのは、夏の間の音楽フェスティバルや講習会です。特に講習会は、日本よりも価格が安く、生徒たちのコンサート機会も多く、充実した内容のものが多い印象を受けました。講習会の中には、参加するためにオーディションが必要なものもあり、選考に通ると参加費は無料、中には講習会とフェスティバルが合体しており、講習会に参加しながらフェスティバルのコンサートに出演し、出演料が出る場合もあります。このようなイベントには、国や地方公共団体の助成や、アーティストサポートに関しては地域の人たちの協力も大きく、長い間芸術支援に力を入れてきた国だからこそできるような仕組みが見られました。

また、パリ国立高等音楽院では、規模は小さいながらもその都度申し込みができるような奨学金が豊富に用意されています。所得や家庭環境に応じて待遇は変わり、中には緊急奨学金も用意されているので、多くの学生が可能な限り、学業を続けられるようなサポートが手厚く用意されています。他にも、学生はオペラ座公演の招待券を申し込むことができ、学校から送られてくる公演のリストや、各ゲネプロ公演から抽選で、年に何回か公演を無料で鑑賞することができます。

そして、これはサクソフォン科とクラリネット科に限ったことにはなりますが、これらのクラスはパリの楽器メーカー「セルマー・パリ」と「バンドレン・パリ」とパートナーシップがあり、在籍中にリードや

マウスピースなどの支給を受けることができます。このパートナーシップは、リードを多く消費する私たちにとっては本当にありがたい制度でした。